



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「Very good departure、また会う日まで」③

次の話にうつる前に種明しをしておこう。コンタクト・レンズがめり込んだのではなく、寝ている間に片目のレンズが外れ落ちた。実に単純な話だが、ヒマラヤという特殊な環境が彼女の知性を乱した。

次の話は北インド・ヒマラヤではなく、南インド・バンガロールの研究所でのことである。日本から到着した次の朝、一人の女性が骨折した。まだ薄暗かったので、20センチほどの側溝に足がはまってしまった。運悪く骨折したようである。

それで市内の大きな病院で診察を受けることになった。わが輩が同行した。

「二ヶ所骨折しています」

若い医師は軽い触診をして言った。

「この医者はヤブだ！」

彼女が声高に言った。彼女は知性満々の人である。教師を辞して大学院でインド哲学を専攻するほどの知性人である。

「一カ所だけよ。わたしのことだから、わかるの！」

それでもお医者さんは二ヶ所と言っています、とわが輩が取り成したが納得しない。「ヤブだ！ヤブだ！」と一向に言うことを聞かない。日本語が分からなくても医師だって彼女の表情で状況を理解できる。

「わたしは五年間ほどヨーロッパの病院で勤務していた。ドイツにオランダに・・・」

わが輩は通訳をやめた。言っても無駄だ。とりあえずレントゲン撮ることを勧めた。

賢明な読者諸氏よ。ここまで言えば、その結果は容易に推測できるだろう。そうだ。骨折は二ヶ所であった。しかも、医師が指摘した場所そのものである。彼は若いけど名医だ。

彼女は猫のように大人しくなった。

骨折は二ヶ所「ある」のに、一カ所しか「無い」と誤解した。

人は「無い」ものを「ある」と誤謬し、「ある」ものを「無い」と誤謬する。知識不足、判断力ミス、先入観に惑わされる等々の理由があるが、常に誤謬しているわけではない。誰だって冷静な時がある。そのときは、結構まともに判断している。この“まともなところ”の状態を保持することが肝要なのである。もう一つ。人さまの言うことは、とりあえず謙虚に聞いてみるものである。

読者諸氏よ。わが輩が言うことを謙虚に聞いて欲しい。インド映画「ガンジスに還る」を観てほしい。

すでに読者諸氏に案内したので観た人も多いただろう。大学でインド哲学を専攻しなくても、サンスクリットを学ばなくても、この映画を観ればインド哲学が理解できる。観なかった人のために、簡単なストーリーを案内しておく。

主人公ダヤは老齢の男である。不思議な夢を何度もみたダヤは自分の死期を覚る。それで死を迎えるために聖地ベナレスに行くと言う。もちろん家族は賛成しなかったが、彼は息子ラジーヴとともにベナレスに行き、死期を迎えるための宿舎（解脱の家）に入所する。入所許可期間は 15 日間である。ところがダヤは死なない。他人名を名乗り延泊することになるが、それでも死なない。最終的にダヤは死を迎えることになるのだが、息子ラジーヴは泣きだし妻と娘が彼を慰める。

この映画の解説を若干加えておく。

人は何度も不思議な夢をみると不安に陥るが、だからといって必ず死ぬわけではない。この辺りは映画なので大目に見るとして、なぜダヤがベナレスに行ったのか。ベナレスで死を迎えることが出来たら「天界」に逝けると信じられているからである。

解脱の家（ムクティ・バワン）で質素な生活をして死期を待つ。ところが簡単に自然死できない。自殺では天界に逝けない。そこで他人名義で延泊することになる。この辺りのやり取りはインド的で面白いので映画を観ていただきたい。

18 年間も自然死できなかった老女ヴィムラが亡くなった。解脱の家では麻薬や酒は禁止だが、ダヤはバングー（大麻）ジュースを飲みガートで幻影をみる。ヴィムラが飛び立つ幻影をみたのである。

私は尋ねた。

これはバングーの仕業か

それとも本物のヴィムラか。

彼女は答えた

ヴィムラと呼ばないで

それは過去の名前

あなたのように生と死の間に捕らわれていた頃の私

今の私は魂（アートマン）です。

解脱を得た

自由な魂（モクシャ・アートマン）

さて、読者諸氏よ。ご遺体を担架に乗せてガートに運び茶毘に伏すのだが、その時の娘スニタの顔を注視していただきたい。娘は微笑んでいる。

なぜ微笑んでいるのか、ここにインド哲学の面白さがある。ダヤは娘のおじいちゃんだから、父の死よりも悲壮感がないのか。それともこの孫娘はあっぱんたんの能天気娘なのか。

いいや違う読者諸氏よ。死生観が違うのだ。

次回、最も難解な概念アートマンについて語ってみようではないか。われわれに本当の自分、アートマン（自己そのもの）があるのか、ないのか。われわれは「無い」ものを「ある」と思っているのか。はたまた「ある」ものを「無い」とおもっているのか。

読者諸氏の生き方の参考になるかもしれない。死ぬのを少し待て、読者諸氏よ。